

「そんなに感じといて恥ずかしいはないだろ。ほら、ちゃんとこつち。……見ろ」

「う、う……あ、はあっ……あ……」

ゆつくりと両腕を顔の前から降ろした彼女と、バッチリ目が合った。彼女を見つめながら小陰唇の間を、下から上、上から下へと顔を何度か往復させてから、尖らせた舌の先端を膣口に差し込んで、ゆつくり抜き差ししてやる。すると、耐え切れないんだろう、彼女はシーツに頭を擦りつけ、微かに悲鳴を漏らした。

しかし、この体勢はそう長いことさせてやれない。自分の体重をほぼ肩と首で支えるのは、想像以上にキツイからだ。それを分かっているんだが、今夜の俺はどうにも昂つてみたいだ。もつとコイツを辱めてやりたい。何度も何度も絶頂に追い立ててやりたい。それに多少無茶をさせたところで、死ぬわけでもない。万が一イキまくって死にそうになったら、その手前でブレーキを掛けてやるさ。ああ、でもそういうばこ数年であいにく壊れてたか、俺のブレーキ。止めてやれそうもないな。残念だ。いつそこのまま壁にでも突っ込んでみるか、一緒に。ドロドロの官能に全身ズブ濡れになって、甘ったるい地獄を猛スピードで走り抜けて。独りでイカレちまうより、コイツが隣にいた方が俺にとっては何倍も救いがある。

クソみたいなハッピーエンドだ。笑えるね。